目白

近藤義見

勉強に疲れて窓を開けると、ほてつた額に夕風が涼しい。夕陽を受けた山の樹々が一層新綠を裝つて芳しい匂ひが鼻に來る。机にもたれ乍ら新綠の夕映えする景色に見取れて居ると、目白の鳴く聲が聞へて來た。耳を澄ますと二三羽居るらしい。私は暫くその鳴き聲に聞きとれて居た。

私は幼少の頃より目白に可成りの親しみを持つて來た。未だ小學校に通つて居た時分、秋から冬に掛けての目白捕りは樂しい日課の一つだつた。又捕らへた目白は毎朝餌をやつたり、水をやつたりして隨分苦勞して馴らしたものだ。春になつて良い聲で高音を張る樣になると、日當りの良い緣側の軒場に籠を掛けては、その聲に桃源境を想像し、又山に持つて行つて草原に寢ころんでは、その聲を聞いて往く雲に思ひを托したりして樂しんだものだつた。目白。私の幼時の思ひ出には無くてはならぬものだつた。

可樣に目白に親しみを持つて居た私が今、この延山で其の懷しい鳴き聲を聞いたのだ。思ひは幼少の故郷へと飛ぶ。

今靜かに目を閉じると、故郷の有樣が繪卷物の如く現れて來る。家の裏山に登つて新綠に包まれた村を眺め、將來偉くなつて村の爲に努力しようと思つたこと。そして其の中に現れて來る野、山、川、それは戰ごつこに、鯉釣りに、幼き頃駈け廻り且つ惡戲した所だ。遊びあかして夕闇を歸つて來ると母が門口で待つて居たりした。噫、母！ 故郷の懷かしさは又戀しさに變る。戀しさを增すとなぜか自然に淋しくなつて來るのだ。故郷を懷ふ心は懷しいだけに淋しい。

我に返つて外を見るともう夕陽は翳つて、薄い夕靄が樹々を包んで居た。目白の聲は聞えなかつた。私は夕靄のやうな淋しさをどうする事も出來なかつた。(2)

日記

丘龍芳

二月三日（木）晴　零下五度

冷たい朝風が身を切る樣だ。おゝ寒い。戶外を見ると雀が二三羽寒さうな顏をして枯木にふくれたまゝ動かふともしない。今朝は霧が深かつた。寺平もあの墓場も霧に包まれて氷のやうに冷たく感じた。今朝は監督樣のお出掛で特に多忙だ。九時、元氣なお顏でお出掛けになつた。用を濟まして統學寮へ行つた。寮生一同机の前で小さく蹲つて居た。霧は大分霽れて朝日が室に明るい。屋根をつたひ落つる霧どけの雫が白く光る。庭の霜柱の解ける音が親しい。寮生と雜談して居ると、突然M役員樣がとんで來て